

陶集偽作説小考

宇賀神 秀一

はじめに

北齊の陽休之は、陶淵明の別集である八巻本と六巻本、蕭統本がそれぞれ相違していることを憂えていた。陽休之「陶潛集序録」には次のように述べられている。

其集先有兩本行于世。一本八巻無序。一本六巻并序目、編比顛乱、兼復闕少。蕭統所撰八巻、合序目伝誄、而少「五孝伝」及「四八目」。然編次有体、次第可尋。余頗賞潛文、以為三本不同、恐終致忘失、今録統所闕、并序目等、合为一帙十巻（其の集は先に兩本の世に行わるる有り。一本八巻にして序無し。一本六巻にして序目を并ぶるも、編比顛乱して、兼ねて復た闕少あり。蕭統の撰する所の八巻、序目伝誄を合するも、而るに「五孝伝」と「四八目」を少く。然して編次体有り、次第尋ぬべし。余頗る潛文を賞す、以為らく三本同じからざれば、終に忘失を致すを恐ると。今統の闕く所を録し、序目等を并せて、合して一帙十巻と為す）。

八巻本には「序」が無い。六巻本は「序目」を備えているが、その配列は入り乱れて、不足するところもある。一方で蕭統本は「序目伝誄」を併せているが、「五孝伝」と「四八目」を欠いている。陽休之は、これらの諸本を統一しなければ、いずれ失われゆくものがあるうと恐れたのである。そこで彼は、その体裁上、最も尊ぶべき蕭統本を基として、そこに「五孝伝」と「四八目」を補い、「序目等」もまた録して十巻本を編纂することにした。

さて、ここにいる「四八目」は、現行本では「集聖賢群輔録」と称されており、部分的には北宋の宋庠が淵明に仮託された偽作であることを指摘し、『四庫全書総目提要』は「集聖賢群輔録」全体に加えて、さらに「五孝伝」もまた偽作と断じた。『五孝伝』とは、「天子孝伝賛」「諸侯孝伝賛」「卿大夫孝伝賛」「士孝伝賛」「庶人孝伝賛」を指している。これらの偽作説は、陶集成成立の源流を論じた梁啓超氏や橋川時雄氏、郭紹虞氏なども支持するところである。一方で潘重規氏は四庫提要の偽作説を真つ向から非難し、潘氏の説は袁行霈氏や楊勇氏などに支持されており、石川忠久氏にも同旨の検討がみられる。

本稿は、陶集に関する四庫提要の偽作説について、近年の研究成果を踏まえて、さらに四庫提要の主張の意図するところも汲み取りながら、その妥当性を再検証していく。その上で、そこから浮かび上がる陶集の成立の捉え方について明らかにしたい。

一

『四庫全書総目提要』集部・別集類に所収の「陶淵明集八卷」（以下、「陶集」提要と略称する）の提要には、「今『四八目』已經睿鑒指示、灼知其贋、別著錄於子部類書而詳弁之（今『四八目』は已に睿鑒の指示を経て、灼らかに其の贋なるを知れば、別に子部の類書に著録して詳らかに之を弁ず）」と述べられているように、「四八目」の偽作説は乾隆帝に「指示」されたものとして、子部・類書類存目に所収される「聖賢群輔録二卷」（以下、「群輔録」提要と略称する）に詳しくみられる。また潘重規氏は、大きく次の四つの観点から検討を加えている。

- ①陽休之增録偽書問題（陽休之が偽書を補録した問題）
- ②四友差錯問題（四友が相違している問題）
- ③五孝伝不見古文尚書問題（「五孝伝」は偽古文『尚書』をみていない問題）
- ④聖賢群補録名実乖迂問題（「聖賢群輔録」という名称と内実の乖離の問題）

まずは、①「陽休之増録偽書問題」に対応する「群輔録」提要の冒頭をみてみよう。

一名「四八目」、旧附載『陶潜集』中。唐宋以来相沿引用、承訛踵謬、莫悟其非。邇以編録遺書、始蒙睿鑒高深、断為偽託。臣等仰承聖訓、詳悉推求、乃知今本『潜集』為北齊僕射陽休之編。休之序録称、「其集先有兩本、一本六卷、排比顛乱、兼復闕少。蕭統所撰八卷、又少『五孝伝』及『四八目』、今録統所闕、併序目等、合為十卷。」是「五孝伝」及「四八目」実休之所増、蕭統旧本無是也。統序称「深愛其文、故加搜校」、則八卷以外、不応更有佚篇。其為晚出偽書、已無疑義（一名は「四八目」、旧くより『陶潜集』の中に附載す。唐宋より以来 相い沿いて引用せらる、訛を承けて謬を踵み、其の非を悟るもの莫し。邇く以て遺書を編録し、始めて睿鑒の高深を蒙れば、断じて偽託と為す。臣等 仰ぎて聖訓を承け、詳悉に推求す、乃ち今本の『潜集』は北齊の僕射陽休之の編為るを知る。休之の序録に称す、「其の集は先に兩本有り、一本は六卷、排比顛乱にして、兼ねて復た闕少あり。蕭統の撰する所の八卷、又「五孝伝」と「四八目」を少く、今統の闕く所を録して、序目等を併せ、合して十卷と為す」と。是れ「五孝伝」と「四八目」とは実に休之の増す所にして、蕭統の旧本に是れ無きなり。統序に「深く其の文を愛し、故に搜校を加う」と称すれば、則ち八卷より以外、応に

更に佚篇有るべからず。其れ晚出の偽書為ること、已に疑義無し。

「一名四八目」と述べるのは、たとえば、汲古閣本『陶淵明集』において「集聖賢群輔録」の題下に「一名四八目」と注されている。また「唐宋」より「以来」、「相沿引用」と述べるのは、「集聖賢群輔録」を収録していた陶集、より広くいえば、該作を引用している司馬貞『史記索隱』や王応麟『玉海』なども該当する。

さて、「群輔録」提要の主張は、蕭統が「搜校」を加えて「五孝伝」と「集聖賢群輔録」を採録していないのであれば、更なる逸篇があるはずもない。そうであれば、兩作が遅くに現れた偽書であることは疑いようがないものと述べている。これはまた「陶集」提要において次のようにみられる。

然昭明太子去潜世近、已不見「五孝伝」「四八目」、不以入集、陽休之何由統得（然して昭明太子は潜の世を去ること近し、已に「五孝伝」と「四八目」を見ず、以て集に入れざれば、陽休之は何に由りて統ぎ得たるか）。

淵明から近くに生きた蕭統が「五孝伝」と「集聖賢群輔録」を目睹しなかったのであれば、陽休之は何によって採録し得たのかと述べており、陽休之は蕭統に比べて淵明と生きた時代が隔たっていることを示唆している。

ところで、淵明の没年は元嘉四年（四二七年）である。蕭統は中興二年（五〇一年）に生まれ、中大通三年（五三一年）に没したのに対し、陽休之は永平二年（五〇九年）に生まれ、開皇二年（五八二年）に没した。

このように淵明の没年より七十四年後に生まれた蕭統に対し、陽休之の生年はそれに遅れること僅かに八年であ

る。蕭統と陽休之の没年については五十年近く隔たっているとはいえ、彼らの参照し得た陶集を考える上で重要なのは、彼らの生きた時代が隔たっているか否かである。こうした蕭統と陽休之の生年の接近から、潘氏は「提要之説、出於憶測、不足信也（提要の説、憶測より出づれば、信ずるに足らざるなり）」と述べている。

しかしながら四庫提要の説についても、全面的には否定し得ないところがある。四庫提要が述べるように、その差が八年であれ、陽休之よりも蕭統の方が淵明に近く生まれた事実は揺るがない。またたとえば、橋川時雄氏の挙げる旧鈔本陶集には、「昭明陶集序末記云、梁大通丁未年夏季六月梁昭明太子蕭統撰。未詳其所本、則昭明編陶、未詳其年月也（昭明の陶集序の末記に云う、梁の大通丁未年の夏季六月 梁の昭明太子蕭統撰、と。未だ其の本づく所を詳らかにせざれば、則ち昭明の陶を編むは、未だ其の年月を詳らかにせざるなり）」とみられる。この記述は、必ずしも信憑性を有するものではないが、今これに従えば、蕭統の陶集編纂の時期は、大通元年（五二七年）となる。また橋川氏は陽休之が陶集を編纂したであろう時期について、宋庠「私記」に「楊僕射所撰」とあり、『北齊書』陽休之伝に「六年、除正尚書右僕射（六年、尚書の右僕射に除正せらる）」とあることから、武平六年（五七五年）前後に編纂されたものと想定している。従って、蕭統と陽休之の陶集の編纂時期という見方に限定すれば、五十年近く隔たっているものと捉えることも出来る。

続けて、②「四友差錯問題」に対応する「群輔録」提要の主張を挙げよう。

且集中「与子儼等疏」称子夏為孔子四友、而此録四友乃為顔回・子貢・子路・子張（且つ集中の「与子儼等疏」は子夏を称して孔子の四友と為すも、而るに此れ四友を録して乃ち顔回・子貢・子路・子張と為す）。

淵明の「与子儼等疏」においては、子夏を孔子の四友に数えており、それに対して「集聖賢群輔録」における孔子の四友は、子夏を数えていないと述べている。まずは、「集聖賢群輔録」の該当箇所をみてみよう。

顔回 子貢 子路 子張

右孔子四友。「文王有胥附・奔奏・先後・禦侮、謂之四隣。孟懿子曰、『夫子亦有四隣乎。』子曰、『吾有四友焉。自吾得回、門人益親、是非胥附乎。自吾得賜、遠方之士日至、是非奔奏乎。自吾得師、前有光、後有輝、是非先後乎。自吾得由、惡言不至於門、是非禦侮乎。』見『孔叢子』（右孔子の四友。「文王に胥附・奔奏・先後・禦侮有り、之を四隣と謂う。孟懿子曰く、『夫子も亦た四隣有るか。』と。子曰く、『吾れ四友有り。吾の回を得てより、門人益ます親なり、是れ胥附に非ずや。吾の賜を得てより、遠方の士日ごとに至る、是れ奔奏に非ずや。吾の師を得てより、前に光有りて、後に輝き有り、是れ先後に非ずや。吾の由を得てより、惡言は門に至らず、是れ禦侮に非ずや。』と。『孔叢子』に見ゆ）。

孟懿子は孔子に対して、先生に文王の四隣である胥附・奔奏・先後・禦侮のような人物はおりますか、と質問した。孔子は、我が四友として顔回・子貢・子張・子路を文王の四隣にそれぞれを比擬しながら応答している。「群輔録」提要が「此録四友乃為顔回・子貢・子路・子張」と述べているのは、確かに「集聖賢群輔録」の記述と一致している。なお、「集聖賢群輔録」の「右孔子四友」以下については、『孔叢子』論書篇に依拠したものであり、たとえば四部叢刊本では「文王」の箇所を「周文王」に作り、「禦侮、謂之四鄰。以免乎牖里之害」とある点などで異同がみられるものの、そのほかは概ね同様である。

次いで、淵明の「与子儼等疏」を挙げよう。

子夏言曰、「死生有命、富貴在天。」四友之人、親受音旨。発斯談者、将非窮達不可妄求、寿夭永無外請故邪（子夏の言に曰く、「死生に命有り、富貴天に在り」と。四友の人、親しく音旨を受く。斯の談を発するは、将た窮達は妄りに求むべからず、寿夭は永く外に請う無き故に非ずや）。

子夏の発言は、『論語』顔淵篇に「子夏曰、『商聞之矣。死生有命、富貴在天。君子敬而無失、……。』」（子夏曰く、商之を聞く。死生 命有り。富貴 天に在り。君子敬して失う無し、……。）と」とみられる。

田部井文雄・上田武氏は「与子儼等疏」の「四友」に対して、『孔叢子』を挙げて「子夏は入っていないが、ここでは孔門の高弟たちというほどの意味で用いていると見られる」と注しているように、厳密に孔子の四友に子夏を含むものとは解しておらず、石川忠久氏は明の何孟春の注に『孔叢子』孔子四友、回・賜・師・由、非子夏。而此云然者、特謂其同列耳（『孔叢子』の孔子の四友は、回・賜・師・由にして、子夏に非ず。而して此れ然云うは、特だ其の同列なるを謂うのみ）とあるのを指摘して、「群輔録」提要における「与子儼等疏」の読みを否定している。また袁行霈氏は、「与子儼等疏」の「四友」に子夏を含むものと捉えるとしても、「至『与子儼等疏』称子夏四友之人、或别有所拠、或記憶之誤（『与子儼等疏』の子夏が四友の人と称されていることについては、別に依拠するところがあったか、記憶の誤まりであろうか）」と述べて、淵明が別の資料に依拠していた可能性、誤記の可能性を指摘している。ただし、孔子の四友に顔回・子貢・子路・子張を挙げるのは、『孔叢子』のほか、鄭玄『尚書大伝』でも同様である。

このように四庫提要の偽作説は、蕭統と陽休之の生きた時代の差を遠いものと捉え、あるいは彼らの編纂時期という観点に立てば、一定程度は首肯し得るものの、確信的な根拠とは看做し難い。また「与子儼等疏」の孔子の四友についても、何孟春などのように解釈することも可能であれば、四庫提要のように子夏に限定しながら解して偽作説を主張するのも、やや無理があるように思われる。

二

「群輔録」提要の③「五孝伝不見古文尚書問題」については、閻若璩『尚書古文疏証』卷一、第十条を踏まえているものと思われる。閻氏は次のように述べている。

『書』有句読、本宜如是、而一旦為晚出古文所割裂、遂改以從之者。『論語』、『書』云、『孝乎惟孝、友於兄弟、施於有政』三句是也。何晏集解引包咸註云、「孝乎惟孝、美大孝之辞。」是以『書』云「為一句、」孝乎惟孝」為一句、「友於兄弟」為一句。『晋書』夏侯湛昆弟誥、「古人有孝乎惟孝、友于兄弟。」潘岳「閑居賦」序、「孝乎惟孝、友于兄弟。此亦拙者之為政也。」是其証也。偽作君陳篇者、竟將「孝乎」二字読属上為孔子之言。歴覽載籍所引詩書之文、從無此等句法（『書』に句読有り、本より宜しく是くの如くすべし、而るに一旦にして晚出の古文の割裂する所と為れば、遂に改めて以て之に従う。『論語』に、「書』に云う、『孝なる乎惟れ孝、兄弟に友たり、有政を施す』の三句是れなり。何晏の集解は包咸註を引きて云う、「孝乎惟孝は、大孝を美するの辞なり」と。是れ『書』云」を以て一句と為し、「孝乎惟孝」を一句と為し、「友於兄弟」を一句

と為す。『晋書』夏侯湛の昆弟誥に、「古人に孝なる乎惟れ孝、兄弟に友たりと有り」と。潘岳「閑居賦」序に、「孝なる乎惟れ孝、兄弟に友たり。此れ亦た拙なる者の為政なり」と。是れ其の証なり。偽りて君陳篇を作る者は、竟に「孝乎」の二字を將て讀みて上に屬けて孔子の言と為す。載籍の引く所の詩書の文を歴覽するに、從りて此れ等の句法無し。

『論語』為政篇には、孔子が『尚書』を引用しながら「子曰、『書』云、『孝乎惟孝、友于兄弟、施於有政。』是亦為政、奚其為為政（子曰く、『書』に云う、『孝なる乎惟れ孝、兄弟に友たり、有政を施す』と。是れも亦た政を為す、奚んぞ其れ政を為すに為さん）」とあり、包咸注には「孝乎惟孝、美大孝之辞（孝乎惟孝は、大孝を美するの辞なり）」とみられる。一方で『尚書』君陳篇においては、「王若曰、君陳、惟爾令德孝恭。惟孝、友于兄弟、克施有政。命汝尹茲東郊、敬哉（王若いて曰く、君陳、惟れ爾令德孝恭。惟れ孝、兄弟に友たり、克く有政を施す。汝に命じて茲の東郊を尹とす、敬まんかな）」とあるように、「孝乎」の二字はみられない。しかも「孝乎惟孝」に作るのは、『晋書』夏侯湛や潘岳「閑居賦」序においても同様である。

閻氏はこうした観点から偽作の『尚書』君陳篇は、『論語』為政篇の「子曰、『書』云、『孝乎惟孝、友于兄弟……』」に基づきつつ、「孝乎」の二文字を孔子の発言と捉えて排し、「惟孝、友于兄弟」が作られたものと説いている。¹²⁰

以上を踏まえて、「群輔録」提要の主張を挙げよう。

又「五孝伝」引「孝乎惟孝、友于兄弟」之文、句讀尚從包咸註、知未見古文『尚書』。而此錄四岳一条、乃引

「孔安国伝」。其出両手、尤自顕然（又「五孝伝」に「孝なる平^{かな}惟れ孝、兄弟に友たり」の文を引く、句読尚お包咸註に従うは、未だ古文『尚書』を見ざるを知る。而して此れ四岳の一条を録して、乃ち「孔安国伝」を引く。其れ両手より出づること、尤も自づから顕然たり）。

「群輔録」提要にみられる「句読」や「包咸註」は、閻氏の説にもみることが出来る。また①の主張で蕭統と陽休之の生きた時代の隔たりを論じるなかで、「其為晚出偽書」と述べていたのも、あるいは閻氏の説に「一旦為晚出古文」とあるのに影響を受けているのであろう。

さて、「群輔録」提要は「五孝伝」の引用する「孝平惟孝、友于兄弟」は、包咸（前七年―六五年）の注釈の「句読」と同様であることから、偽古文『尚書』をみていない。他方「集聖賢群輔録」においては偽孔伝が引用されていることから、「五孝伝」と「集聖賢群輔録」の作者は別人であると述べている。「集聖賢群輔録」における孔安国伝の引用は、「義仲・義叔・和仲・和叔」を挙げるなかで、次のようにみられる。

右義和四子。孔安国云、「即堯之四岳、分掌四岳諸侯。」鄭玄云、「堯既分陽為四時、命義仲・和仲・義叔・和叔等為之官、又主方岳之事、是為四岳」。見鄭『尚書注』（右義和の四子。孔安国云う、「即ち堯の四岳、分けて四岳の諸侯を掌る」と。鄭玄云う、「堯既に陽を分けて四時と為す、義仲・和仲・義叔・和叔等に命じて之を官と為す、又方岳の事を主る、是れ四岳と為す」と。鄭『尚書注』に見ゆ）。

孔安国の「即堯之四岳、分掌四岳諸侯」については、潘氏が指摘するように、『尚書正義』堯典篇に「帝曰咨四

岳」とあり、ここに附された偽孔伝に「四岳、即上義和之四子、分掌四岳之諸侯、故称焉（四岳は、即ち上の義和の四子、分けて四岳の諸侯を掌る、故に焉を称す）」とみられるのと概ね一致している。また偽孔伝の作者については、東晋の梅賾や西晋の皇甫謐とする説、魏の王肅とする説や、あるいはその門人とする説などがあるが、いずれにしても淵明の没した劉宋以前のものである。

さらにまた、この「群輔録」提要の主張は、「陶集」提要においては次のようにみられる。

且「五孝伝」及「四八目」所引『尚書』自相矛盾、決不出於一手（且つ「五孝伝」と「四八目」の引く所の『尚書』は自づから相い矛盾すれば、決して一手より出でず）。

「五孝伝」と「集聖賢群輔録」における『尚書』の引用文は矛盾し、一人の作者が記したものであるのではないと述べているように、「五孝伝」の依拠した『尚書』は、偽古文『尚書』以前のものであるのに対し、「集聖賢群輔録」の依拠した『尚書』は、孔安国伝の附された偽古文『尚書』であるという矛盾を指摘しているのである。

以上を踏まえて「五孝伝」、すなわち「卿大夫孝伝賛」を挙げれば次の通りである。

孔子、魯人也。入則事父兄、出則事公卿、喪事不敢不勉、故称曰、「孝乎、惟孝、友於兄弟、是亦為政也。」君賜腥、必熟而薦之、雖蔬食而斉、祭如在……（孔子は、魯人なり。入りては則ち父兄に事え、出でては則ち公卿に事う、喪事敢えて勉めずんばあらず、故に称して曰く、「孝なる乎、惟れ孝、兄弟に友なり、是れ亦た政を為すなり。」と。君腥きを賜うや、必ず熟して之を薦む、蔬食と雖も斉し、祭に在るが如し……）。

孔子は、家庭では父兄に仕え、外では公卿に仕え、喪事にも勉めた。それ故に孔子は「孝乎惟孝……」と称したと述べられている。

このように「卿大夫孝伝賛」では、孔子を称える伝において、孔子の発言として、『論語』に引かれる『尚書』の一文が引用されている。そうであれば、必ずしも四庫提要が述べるように『尚書』それ自体からの引用と考えるなければならないことはない。石川氏忠久が『『尚書』を直接引用しているのではなく、『論語』の『尚書』引用部分を引用したに過ぎない』と述べている通りであろう。

以上のように、四庫提要の偽作説において、蕭統と陽休之の生きた時代の隔たりや孔子の四友の問題などは、根拠に乏しいものであるが、全面的には否定し得ないところがある。だが、ここにみた主張については、近年の研究と同様に否定的に捉えるべきものといえる。

三

「群輔録」提要の最後の主張は、④「聖賢群補録名実乖迕問題」であり、「集聖賢群輔録」という名と、そこで挙げられる人物達の乖離を論じたものである。次に挙げよう。

至書以「聖賢群輔」為名、而魯三桓・鄭七穆・晋六卿・魏四友、以及仕莽之唐林・唐遵、叛晋之王敦、續列簡編、名実相迕理乖風教、亦決非潜之所為（書の「聖賢群輔」を以て名と為すに至りては、而して魯三桓・鄭

七穆・晋六卿・魏四友、以て莽に仕うるの唐林・唐遵、晋に叛けるの王敦に及ぶまで、簡編に續列す、名実相い迂りて理は風教に乖くも、亦た決して潜の為す所に非ず。

その題に「聖賢群輔」と称しつつも、魯の三桓・鄭の七穆・晋の六卿・魏の四友、王莽に仕えた唐林・唐遵、西晋に反旗を翻した王敦などが挙がっている点に疑義を呈している。ただ、藩氏が指摘するように、そもそも「集聖賢群輔録」は悪人もまた採録対象となっており、その末尾に附される跋文に次のようにみられる。

凡書籍所載及故老所伝、善惡聞於世者、蓋尽於此矣。漢称田叔・孟舒等十人及田横両客、魯八儒、史並失其名。夫操行之難、而姓名翳然、所以撫卷長慨、不能已已者也（凡そ書籍の載する所と故老の伝うる所、善惡世に聞こゆる者、蓋し此ここに尽く。漢に田叔・孟舒等の十人と田横の両客、魯の八儒を称するも、史並びに其の名を失す。夫れ操行の難きなるか、姓名翳然たり、所以に巻を撫して長慨す、已に已むを能わざる者なり）。

書籍や老人の伝承するところにおいて、世に伝える「善」人と「悪」人は、以上であると述べられている。加えて「集聖賢群輔録」においては、王莽に仕えた「唐林」「唐尊」などを挙げるにしても、左思の「二唐絜己、乃点反汗（二唐 己を絜ぎよくするも、乃ち点じ反つて汗る）」が引用されている。左思は、唐林・唐尊が汚れたものと述べているように、「集聖賢群輔録」がこうした発言を引用していることからすれば、彼らは「悪」人として挙げられているものと捉えられる。

しかしながら「集聖賢群輔録」という名と、本文に「悪」も挙げることを述べる矛盾は、疑問として残る。その

点について潘氏は次のように述べている。

「聖賢群輔録」、本名「四八目」、宋以前蓋未有称「聖賢群輔録」者。陽休之「序録」称「……『四八目』」、未嘗举「聖賢群輔録」之名也。宋初宋庠本「私記」所得旧本、亦惟举「四八目」、初無「聖賢群輔録」之名（「聖賢群輔録」、本名は「四八目」、宋以前蓋し未だ「聖賢群輔録」と称する者有らず。陽休之の「序録」に「……『四八目』」と称するも、未だ嘗て「聖賢群輔録」の名を挙げざるなり。宋初の宋庠本「私記」の得る所の旧本も、亦た惟だ「四八目」を挙ぐるのみ、初め「聖賢群輔録」の名無し）。

陽休之が「四八目」と称しているほか、宋庠「私記」や思悦「書靖節先生集後」などが、「四八目」と称していることから、「集聖賢群輔録」という名は後出のものとして、「四八目」こそが「本名」であると述べている。

だが、陽休之のいわゆる「五孝伝」という名についても、たとえば、汲古閣本『陶淵明集』や蘇写本『陶淵明集』、李公煥本『箋注陶淵明集』、張溥『陶彭沢集』などにはみられない。してみると、陽休之は「天子孝伝賛」「諸侯孝伝賛」「卿大夫孝伝賛」「士孝伝賛」「庶人孝伝賛」の五つを便宜的に「五孝伝」と略称しているものと考えられる。そうであれば、陽休之のいわゆる「四八目」もまた便宜的に呼称されたものに過ぎない可能性も否めない。

もつとも、唐代において「四八目」と称されていたことは確かであり、『史記』留侯世家の「天下有四人（天下に四人有り）」に附された司馬貞『索隱』には、次のようにみられる。

四人、四皓也。謂東園公・綺里季・夏黃公・角里先生。按『陳留志』云、「……」。京師号曰霸上先生、一曰角里先生」。又孔安国『秘記』作「禄里」。此皆王劭掇『崔氏・周氏系譜』及陶元亮「四八目」而為此說（四人は、四皓なり。東園公・綺里季・夏黃公・角里先生を謂う。按ずるに『陳留志』に云う、「……」。京師号して霸上先生と曰い、一に角里先生と曰う」と。又孔安国『秘記』は「禄里」に作る。此れ皆な王劭の『崔氏・周氏系譜』と陶元亮の「四八目」に拠りて此の說を為す）。

司馬貞の發言を以つて唐代の代表と看做すことは出来ないが、彼が「四八目」の名を用いていたことが分かる。またこれは「集聖賢群輔錄」の次の条を踏まえたものである。

園公「注…姓園名秉、字宣明、陳留襄邑人。常居園中、故号園公。見『陳留志』」綺里季夏黃公「注…姓崔名廓、字少通、齊人。隱居修道、号夏黃公。見『崔氏譜』」角里先生（園公「注…姓は園名は秉、字は宣明、陳留襄邑の人。常に園中に居る、故に園公と号す。『陳留志』に見ゆ」綺里季夏黃公「注…姓は崔名は廓、字は少通、齊人なり。隱居して道を修め、夏黃公と号す。『崔氏譜』に見ゆ」角里先生）

『陳留志』を挙げている点は、司馬貞『索隱』と同様であり、本書は『隋書』經籍志、史部・雜伝類に「陳留志十五卷東晋剡令江敝撰」とみられるように、東晋の江敝の著述である。『崔氏譜』については、司馬貞の挙げる「崔氏系譜」であるだろう。本書は「隋志」に未収で、『吳書』諸葛亮伝の裴松之注において一例ばかりみられる。以上を踏まえて「集聖賢群輔錄」という名に立ち返れば、唐代においては「四八目」とも異なつて称されていた

可能性もある。江淹「雜體詩」の「孫廷尉〔雜述〕綽」には、四皓を挙げて「領略帰一致、南山有綺皓（領略帰して致を一にし、南山に綺皓有り）」（第十五・十六句）とあり、文選鈔は次のように注している。

鈔曰、……南山、周南山也。綺李季・園公・夏里黄公・角里先生、是謂四皓。『陳留志』云、「園公、姓園名庚。」『古賢集目』云、「夏黄公、姓崔名廊。」其餘未詳。以其元老、故為四皓。言略省同帰一致、故南山有綺皓之人（鈔に曰く、……。南山は、周南山なり。綺李季・園公・夏里黄公・角里先生、是れを四皓と謂う。『陳留志』に云う、「園公、姓は園名は庚」と。『古賢集目』に云う、「夏黄公、姓は崔名は廊」と。其餘は未だ詳らかならず。其の元老を以てす、故に四皓と為す。言うところは略省して帰を同じくして致を一にす、故に南山に綺皓の人有り）。

文選鈔は「集聖賢群輔録」や司馬貞と同じように『陳留志』を挙げており、一方で「古賢集目」は「隋志」に未収で、森野繁夫氏は「いかなる書か未詳」と指摘している。だが、「古賢集目」の引用文である「夏黄公、姓崔名廊」は、「集聖賢群輔録」の本文に「夏黄公」とあり、その注に「姓崔名廊」とみられるのと一致している。

このようにみていくと、四皓に関して先ず以って重んずべき資料は、共通して『陳留志』や『崔氏譜』などであったのであろう。そして、司馬貞『索隱』において、そうした資料と併せて「集聖賢群輔録」も重視され、またそれと記述が一致する「古賢集目」は、「四八目」ないし「集聖賢群輔録」である蓋然性が高いといえる。章学誠は「蓋古人称名樸、而後人入於華也（蓋し古人の名を称するや樸にして、而るに後人は華に入るるなり）」と述べており、書名は後世に至るにつれて華美になる傾向があると説いているのを踏まえれば、それに類する事例として

「四八目」、あるいは「古賢集目」から「集聖賢群輔録」に変化していったものと捉えることが出来る。²⁹⁾ 以上のように、「集聖賢群輔録」という名称は、宋代の資料に多くみることが出来、唐代においては「四八目」と称されていたことが確認される。しかし、それが本名であったとは断じ得ない。しかも、唐代においては「四八目」のほか、「古賢集目」と称されていた可能性もある。「古賢」とあり、本文に「悪」もまた対象とすることが記されている点からすれば、名称と内実は古くから乖離していたものといわざるを得ない。

四

「群輔録」提要の偽作説において、①の蕭統と陽休之の生きた時代の差や、②の「与子儼等疏」における孔子の四友に子夏を含むものと解するか否か、あるいは④の名称と内実の乖離などは、全面的に否定し得るものとはいえない。だが、近年、四庫提要の偽作説が否定的に捉えられていもいるように、明確な根拠に裏打ちされた主張でないことは留意しなければならない。そして、本稿では、近年の研究と同様に偽作説否定の立場をとる。四庫提要の偽作説において問題視すべきは、その論証の仕方である。陽氏「序録」と、「群輔録」提要における陽氏「序録」を並べ挙げよう。

其集先有兩本、行于世。一八卷無序。一本六卷并序目。編比顛乱。兼復闕少。蕭統所撰八卷、合序目伝誄、而少「五孝伝」及「四八目」。

（陽休之「陶潜集序録」）

其集先有兩本、一本六卷、排比顛亂、兼復闕少。蕭統所撰八卷、又少「五孝伝」及「四八目」。

（「聖賢群輔録」提要）

陽休之の述べる「兩本」は、蕭統本以前の八卷本と六卷本であるにも拘わらず、「群輔録」提要の「兩本」は、六卷本と蕭統本である。なお、四庫全書本『陶淵明集』の底本については、拙訳の「陶集」提要において、その体裁、及び文字の異同等から李公煥本系統の休陽程氏本であろうことを指摘した³⁰。その巻末に附される陽氏「序録」もまた「群輔録」提要における陽氏「序録」のようにには作られていない。さらにまた「陶集」提要における陽氏「序録」は、次のように引用されている。

北齊陽休之序録、潜集行世凡三本、一本八卷無序。一本六卷有序目、而編比顛亂、兼復闕少。一本為蕭統所撰、亦八卷、而少「五孝伝」及「四八目」（北齊の陽休之の序録に、潜の集の世に行わるるもの凡そ三本、一本は八卷にして序無し。一本は六卷にして序目有るも、編比顛亂して、兼ねて復た闕少す。一本は蕭統の撰する所と為る、亦た八卷にして、「五孝伝」及び「四八目」を少く、と）。

（「陶淵明集」提要）

「群輔録」提要とも異なつて八卷本を挙げているが、陽氏「序録」の「先」字を排して、「凡」字を増し、「兩本」を「三本」に改めて、八卷本・六卷本と蕭統本を並列的に挙げている。この異同についても拙訳において「提要が『兩本』を『三本』に改めたのは、蕭統本を数えてのことであろう」と注したが、いま明らかにすべきは、四庫提要が敢えて変更したことの意味であるだろう³¹。

四庫提要の陽氏「序録」の引用のあり方で共通しているのは、蕭統本が、蕭統本に先行する八卷本や六卷本と、

あたかも同時代に通行していたかのように解されるという点である。またこれが「群輔録」提要の「是『五孝伝』及『四八目』実休之所増、蕭統旧本無是也。……其為晚出偽書」という主張や、「陶集」提要の「然昭明太子去潜世近、已不見『五孝伝』『四八目』、不以入集、陽休之何由統得」といった主張を補強している。そうだとすれば、四庫提要における陽氏「序録」の文字の異同は、偽作説を成立させるための、意図的な改作といわざるを得ない。孔子の四友の相違において「此録四友」と述べていたのも、『集聖賢群輔録』は四友を録して」と解されるが、その実、『孔叢子』に基づくものであり、「陶集」提要において「且『五孝伝』及『四八目』所引『尚書』自相矛盾、決不出於一手」と述べているのも、『尚書』と、その実、『論語』の『尚書』引用部分」、すなわち『論語』である。四庫提要の陶集に関わる偽作説、厳密に言えば乾隆帝に「指示」され、立てられた偽作説は、陽氏「序録」を隠微に改め、事実と異なるような示し方で展開されている。このように論ぜざるを得なかったことからすれば、もとより四庫館臣からしてみても、蕭統と陽休之の生きた時代が接近していることや、孔子の四友の相違、『尚書』のテキストの相違を根拠とするに無理があることなど、当然ながら把握していたのであろう。だが、それでも四庫館臣らは、偽作説を主張せざるを得なかったとして、潘氏は次のように述べている。

及乾隆帝見「四八目」中多載魯三桓・晋六卿・司馬懿・王敦之流、惡其有不臣之心、故深所不喜。所謂「名実相迁、理乖風教」即乾隆帝之隱私也。諸臣迎合其意、遂羅織周内以成其獄。當時諸臣处清帝淫威之下、自有其不得已之苦衷、独怪二百年来、号称博学方聞之士、随声附和、竟不之察、使淵明著作、横遭剝削、亦可哀矣（乾隆帝は「四八目」の中に多く魯三桓・晋六卿・司馬懿・王敦の流れを載するを見るに及んで、其の不臣の心有るを惡む、故に深く喜ばざる所なり。所謂「名実相い迁りて、理風教に乖く」とは、即ち乾隆帝の隱

私なり。諸臣 其の意に迎合す、遂に羅織周内して以て其の獄と成らん。当時の諸臣は清帝の淫威の下に処れば、自ら其の已むを得ざるの苦衷有り、独怪二百年來、号して博學方聞の士と称せらるるも、随聲附和す、竟に之を察せずして、淵明の著作をして、横遭剥削せしむれば、亦た哀しむべし。

乾隆帝が魯三桓・晋六卿などの惡臣を嫌惡していたこと、四庫館臣らは、そうした乾隆帝に屈服しなければならなかったとして、清朝に敷かれた嚴しい言論統制の影響を指摘している。

以上、本稿が四庫提要の陶集に関する偽作説に対して、否定の立場をとる所以である。最後に、こうした観点から浮かび上がる陶集の成立の有り様を捉え直して、稿を結ぶことにしたい。

五

郭紹虞氏は、梁啓超氏や橋川時雄氏の見解を集成しつつも、宋代以前の陶淵明の別集を五種に定めた¹⁾。すなわち、梁代以前の通行本として、六卷本と八卷本、宋代以前のものとしては、蕭統八卷本、陽休之十卷本、南唐本である。そのうち、南唐本を除いた四種は、陽氏「序録」にみられる²⁾。

また「隋志」集部・別集類に「宋徵士陶潛集九卷」とあり、そこに注された梁代の書誌情報に「梁五卷、録一卷」とみられる。梁氏は、前者の九卷本は、陽休之の編纂した十卷本の録一卷を欠いたものとする。後者については、陽休之の参照した六卷本と同様のものと指摘しており³⁾、また蕭統本を論じるなかでは「似昭明將旧五卷釐為六卷（昭明 旧五卷を將て釐めて六卷と為すに似たり）」と述べているように、蕭統の参照したテキストが「旧五

卷」、すなわち六卷本であることを述べている¹¹⁾。

橋川氏の六卷本に対する見解も概ね梁氏と同様であり、「抑為昭明所觀幾本中之一耶（抑そも昭明の觀る所の幾本中の一為らんか）」と述べて蕭統の参照した一本であろうことを説いている。なお、梁氏は『旧唐書』經籍志・別集類の「陶泉明集五卷」について、「或即梁五卷而亡其錄也（或いは即ち梁の五卷にして其の錄を亡ぶなり）」と指摘しており、橋川氏は「六卷本隋時已佚、新旧『唐志』所著錄之五卷本、並踏襲『隋志』所錄而存其目（六卷本隋時に已に佚す、新旧『唐志』に著錄する所の五卷本、並びに『隋志』の所錄を踏襲して其の目を存す）」と述べて、六卷本の隋代における散逸を指摘している。だが、近年において旧「唐志」は、『古今書錄』に依拠するものとされており、そうであれば六卷本は、梁氏のいうように錄一卷を欠いた五卷として、遅くとも玄宗の開元年間頃まで残っていた可能性もあるだろう。

次いで、八卷本の構成については、梁氏、橋川氏、郭氏の説が分かれるところである。三者の想定する八卷本の構成を挙げよう。

I 集五卷・「五孝伝」一卷・「四八目」二卷

（梁啓超『陶集考証』「旧八卷本」）

II 集七卷・錄一卷

（橋川時雄『陶集版本源流攷』「梁八卷本其一」）

III 集五卷・「五孝伝」一卷・「四八目」一卷・錄一卷

（郭紹虞『陶集考弁』「八卷本」）

梁氏は次のように述べている。

陽休之所謂「八卷無序」者也。此本殆於五卷外加入「五孝伝」一卷、「四八目」上下二卷、共為八卷。故休之
拠此而言五卷本之「闕少」也（陽休之の所謂る「八卷にして序無」き者なり。此の本は殆ど五卷の外に「五孝
伝」一卷、「四八目」上下二卷を加入して、共に八卷と為す。故に休之は此れに拠りて五卷本の「闕少」を言
うなり）。

（「旧八卷本」）

陽氏「序録」の八卷本は、「集五卷」に「五孝伝」と「集聖賢群輔録」の三卷を加えたものとして、六卷本と殆
ど同様の体裁を取り、六卷本の「闕少」に当たるのが、「五孝伝」と「集聖賢群輔録」と述べている。また梁氏は
兩作について「此兩部分決非淵明作、四庫提要弁之甚明（此の兩部分は決して淵明の作に非ず、四庫提要之を弁
ずること甚だ明らかなり）」と述べて、四庫提要を支持していることを確認しておく。

橋川氏もまた「陶公以成書、久輯於陶集者、有『五孝伝』、『聖賢群輔録』二書（陶公に偽仮して以て書を成し、
久しく陶集に輯せらるる者、『五孝伝』、『聖賢群輔録』の二書有り）」と述べて、四庫提要の偽作説を引用している。
橋川氏が兩作を偽作と捉えている点は梁氏と同様であるが、八卷本の構成については異なっている。次に挙げよう。

拠陽休之序而言、陽氏改編以前、陶集有三本、其一即八卷本、別有蕭統八卷本、陽序云、「其集先有兩本行于
世。一本八卷無序。」按玩其文、此本亦必当梁以前之物、集七卷・録一卷、凡八卷者也（陽休之序に拠りて言
えば、陽氏の編を改むる以前、陶集に三本有り、其の一は即ち八卷本なり、別に蕭統八卷本有り、陽序に云う、

「其の集は先に兩本の世に行わるる有り。一本八卷にして序無し」と。按ずるに其の文を玩わ^かえば、此の本も亦た必ず当に梁以前の物なるべし、集七卷・録一卷、凡そ八卷の者なり」。

（「梁八卷本其一」）

橋川氏は、必ずしも八卷本に「五孝伝」と「集聖賢群輔録」が収録されていたとは捉えておらず、録一卷を加えている点で梁氏と見解を異にする。続けて、郭氏の見解を確認しておけば、上掲の梁氏と橋川氏の説を折衷しながら、次のように述べている。

梁啓超『陶集考証』謂、「此（八卷）本、殆於五卷外加入『五孝伝』一卷、『四八目』上下二卷、共為八卷。」其謂五卷外加「五孝伝」、「四八目」二種甚是、惟謂「四八目」分上下二卷、則拋後世「四八目」分二卷者言之、非其旧也。橋川時雄『陶集版本源流攷』謂、「此本亦必当梁以前之物、集七卷・録一卷、凡八卷者也。」則似「四八目」不応分卷、以分卷以後、益以録一卷、其卷数当為九卷也。考陽休之本凡十卷、於「四八目」亦不分卷、由後推前、知此本亦不応分卷、自以橋川氏之說最允（梁啓超『陶集考証』に謂う、「此の（八卷）本は、殆ど五卷の外に『五孝伝』一卷、『四八目』上下二卷を加入して、共に八卷と為す」と。其の五卷の外に「五孝伝」、「四八目」の二種を加うと謂うは甚だ是なり、惟だ謂えらく「四八目」上下二卷に分くるは、則ち後世に「四八目」の二卷に分くる者に拠りて之を言うも、其の旧に非ざるなり。橋川時雄『陶集版本源流攷』に謂う、「此の本も亦た必ず当に梁以前の物なるべし、集七卷・録一卷、凡そ八卷の者なり」と。則ち「四八目」は卷を分くるに応ぜざるに似たり、卷を分くるを以て以後、益して録一卷を以てす、其の卷数は当に九卷為るべきなり。考うるに陽休之本は凡そ十卷、「四八目」に於いても亦た卷を分けず、後より前を推せば、此の本

も亦た巻を分くるに応ぜざるを知る、自づから橋川氏の説を以て最も允たり。

（「八巻本」）

郭氏は、梁氏が八巻本に「五孝伝」と「集聖賢群輔録」が収録されていたと述べるのを肯定的に捉え、橋川氏の録一卷を加える説もまた支持しているが、「集聖賢群輔録」の構成については、梁氏や現行諸本のごとくに二巻ではなく、一巻のみで構成されていたと想定している。郭氏は蕭統本について、陽氏「序録」に「序目伝誄」とあることから「集七巻、録一卷」と想定しており、陽休之の本については「集九巻、内『五孝伝』一卷、『四八目』一卷、集外序目一卷」と想定している。つまり、陽休之の編纂した十巻本が蕭統本に基づいているのであれば、「集七巻」となり、そこに「五孝伝」一卷、「集聖賢群輔録」一卷、目録一卷を併せることで、都合十巻となる。

さて、梁氏と橋川氏の八巻本に対する見解において、目録の有無や、「五孝伝」と「集聖賢群輔録」が収録されていたのか否か、という点で相違しているのは、陽氏「序録」の「一本八巻無序。一本六巻并序目、編比顛乱、兼復闕少」の解釈の相違に起因するのである。六巻本には「序目」とあるように、目録が有ることは明らかであるが、八巻本の「無序」については、序も目録も欠いているのか、それとも序のみを欠き、目録については有るのか、判然としない。従って、梁氏は陽氏「序録」の八巻本の「無序」を目録もまた欠くものと解し、橋川氏と郭氏は「序」のみを欠き、目録は有るものと解したものと捉えられる。両者いずれも筋の通った解釈であり、そうであれば梁氏の見解も等閑には附し難い。また、六巻本の「闕少」は、八巻本の「五孝伝」と「集聖賢群輔録」に当たるものと解することも出来ようが、六巻本それ自体の「序目」との対応において、不足あるものとも解される。

以上を踏まえて八巻本の構成についていえば、次のように想定することも可能である。

IV 集六卷・「五孝伝」一卷・「四八目」一卷

V 集八卷

ただし、梁氏と郭氏は八卷本に「五孝伝」と「集聖賢群輔録」が収録されていることに拘っていた。郭氏は八卷本について、次のようにも述べている。

此「五孝伝」、「四八目」二種、原非陶氏所撰、『四庫全書提要』弁之甚明。考陽休之十卷本有此二種、而昭明八卷本無之、則知陽氏所摭以編入者、即為此八卷本、而此八卷本者實為伝写本中之竄入偽作者也（此れ「五孝伝」、「四八目」の二種は、原より陶氏の撰する所に非ず、『四庫全書提要』之を弁ずること甚だ明らかなり。考うるに陽休之十卷本に此の二種有り、而るに昭明八卷本に之無ければ、則ち陽氏の摭りて以て編入する所、即ち此の八卷本為るを知るなり、而して此の八卷本なる者は実に伝写本中の偽作を竄入する者と為すなり）。

（「八卷本」）

郭氏は四庫提要の偽作説を支持しつつ、陽休之本に収録される「五孝伝」と「集聖賢群輔録」が、蕭統本に収録されていなかったのであれば、両作は八卷本に収録されていたと述べている。この見解は、恐らくは梁氏や橋川氏が蕭統は六卷本を参照していたという主張、また「陶集」提要における「昭明太子去潜世近、已不見『五孝伝』、『四八目』」という主張に影響を受けており、蕭統は「五孝伝」と「集聖賢群輔録」が収録されているよう八卷本を参照していないために、両作を収録しなかったと捉えているのであろう。

そうした可能性はなお考慮されるべきであるが、しかし蕭統が六卷本のみを参照し、八卷本を目睹していないと

捉えるのは、本当に妥当なのであろうか。そもそも蕭統と陽休之の生年差は僅かに八年であり、八巻本は六巻本と併せて陽氏「序録」に「兩本行于世」とあるように、当世に流布していた通行本に過ぎない。一方で蕭統は、陶集序文に、「余愛嗜其文、……、故加搜校、粗為区目（余愛して其の文を嗜す、……、故に搜校を加えて、粗に区目を為す）」と述べているように、淵明詩文を採し、校訂を加えてもいる。

さらにいえば、六巻本のみでは蕭統が八巻本を編纂するには不足している。無論、そうした不足分については、六巻本を分けて編纂したとも、蕭統の居た東宮三万巻以上の蔵書から補ったと考えることも可能である。だが、蕭統のそうした膨大な蔵書量も念頭に据え、梁代以前に八巻本がある以上、まず考慮すべきは八巻本である。また八巻本の構成は、IV「集六巻・『五孝伝』一卷・『四八目』一卷」のようにも想定し得ることからすれば、「集五巻・録一卷」の六巻本よりも、一卷分の余剰が生じる。またV「集八巻」のようにも想定し得るものであり、必ずしも「五孝伝」と「集聖賢群輔録」が収録されていたとは断じ得ず、そうであれば「五孝伝」と「集聖賢群輔録」のいずれかは、六巻本に収録されていた可能性も否めない。

以上にみた蕭統と陽休之の発言、彼らの生きた時代、八巻本の構成などを考慮すれば、蕭統は「集五巻」の六巻本のみならず、八巻本もまた参照しながら作品を厳選し、その上で「集七巻・録一卷」の蕭統本が編纂されたものと捉えることも出来る。

そして、こうした想定の余地を排したのが、四庫提要の陶集に関わる偽作説であるだろう。四庫提要の偽作説否定の立場から浮かび上がる陶集成立の捉え方は、以上のごときである。

おわりに

本稿は、陶集に関わる四庫提要の偽作説について、近年の研究成果を踏まえつつ、改めて検証を加えていった。「群輔録」提要、及び「陶集」提要の偽作説は、確信的な根拠と捉えることは出来ないものの、否定し得ない側面もある。本稿では、四庫提要の偽作説の根拠の乏しさに留意しつつ、四庫提要の論証の仕方に注目し、改めて偽作説否定の立場を取ることにした。

またそうした立場からすれば、蕭統は六卷本のみならず、八卷本も参照していたものと捉えることが出来る。蕭統は淵明詩文を愛好し、「搜校」として淵明の作品を広く探し求め、主体的な態度で編纂していった。それ故に「五孝伝」と「集聖賢群輔録」を採録しなかったものと考えられる。もし蕭統が「五孝伝」と「集聖賢群輔録」を偽作と捉えて排したとしても、その内実の詳細な検討を要するものであり、こうした検討は蕭統の文学観を見直していく上でも、重要な示唆を含んでいるものと思われるのである。

もとより、「五孝伝」と「集聖賢群輔録」を採録していたであろう八卷本、あるいは六卷本、そして、陽休之本、汲古閣本や李公煥本などといった陶集の編者達は、両作を淵明の作として扱って来た。そうした彼らのおもい描いていた陶淵明像というのは、両作を踏まえたものであったことは間違いない。またそれは蕭統の描く陶淵明像とも、何らかの意味において異なるものであったのであろう。そうであれば、両作を踏まえた陶淵明像を明らかにすることは、淵明の後世における受容の有り様を考える上でも、決して看過出来ないものと思われる。こうした点を今後の課題として附記し、稿を結ぶことにしたい。

* 底本には汲古閣本『陶淵明集』（中華再造善本、二〇〇三年）を用いた。陽休之「陶潛集序録」、宋庠「私記」、思悦「書靖節先生集後」などの引用に当たっても該書に拠る。なお、「五孝伝」と「集聖賢群輔録」を採録しているのは、汲古閣本、蘇写本『陶淵明集』（中華再造善本、二〇〇〇年）、李公煥本『箋注陶淵明集』（四部叢刊本）、陶澍『靖節先生集』（四部備要本）など、近年では袁行霈『陶淵明集箋注』（中華書局、二〇〇三年）、楊勇『陶淵明集校箋』（上海古籍出版社、二〇〇七年）などである。

* 宋庠「私記」には「『五孝伝』已下至『四八目』、子注詳密、広於他集。惟篇後『八儒』『三壘』二条、此似後人妄加、非陶公本意（『五孝伝』より已下『四八目』に至るまで、子注詳密にして、他集に広し。惟だ篇後の『八儒』『三壘』の二条のみ、此れ後人の妄加するに似たり、陶公の本意に非ず）」と述べられており、宋庠が「集聖賢群輔録」に部分的に偽作が混じっているとするのは、本作跋文に「魯八儒、史並失其名」などとありつつも、この後に「八儒」「三壘」が挙げられていることに拠る。

* 『四庫全書総目提要』の引用に当たっては、浙江本の影印である『四庫全書総目提要』（中華書局、一九六五年）を用いた。

* 藩重規氏「聖賢群輔録新箋」（『新亞書院學術年刊』第七期、一九六五年、三〇五〜三三五頁）、袁行霈氏前掲書（六〇一〜六〇二頁）、楊勇氏前掲書（三二三〜三二五頁）を参照。また石川忠久氏「史家としての陶淵明」（『桜美林大学中国文学論叢』第一号、一九六八年に所収。後に『陶淵明とその時代』第三章「隠士陶淵明」、第四節「史家としての陶淵明」研文出版、一九九四年、一二〜二四頁に所収。本稿では後者を用いた）を参照。

* 司馬貞『史記索隱』の例については後述する。王応麟は『玉海』卷二一〇・官制「三公宰相」において、「陶淵明『集聖賢群輔録』、金提主化俗、鳥明主建福、視默主災惡、紀通為中職、仲起為海陸、陽侯為江海、見『論語摘輔象』」と引用している。

* 橋川時雄氏『陶集版本源流攷』（文字同盟社、一九三二年、第三卷。後に汲古書院、一九九一年に復刻。本稿では後者を用いた）を参照。引用は「梁八卷本其二」の注（四五頁、四葉）に拠る。

* 田部井文雄・上田武氏『陶淵明集全釈』（明治書院、二〇〇一年、三八〇頁）

* 何孟春注の引用は、龔斌『陶淵明集校箋』（里仁書局、二〇〇七年、四四六頁）に拠る。

*9 袁行霈氏前掲書に所収の「外集 集聖賢群輔錄下」の「考辨」(五九八頁)に拠る。

*10 鄭玄『尚書大伝』(四部叢刊本、卷二・十九葉)を参照。

*11 閻若璩『尚書古文疏証』(上海古籍出版社、一九八七年、九九―一〇三頁)

*12 閻若璩はさらに次のようにも述べている。

然則載籍中亦有孝乎惟孝句法耶。余曰有之。仲尼燕居、「子貢曰、敢問將何以為此中者也。子曰、礼乎礼。夫礼所以制中也。」
「礼乎礼」非此等句法耶。偽作古文者、不又於句讀間現露一破綻耶(然らば則ち載籍中に亦た「孝乎惟孝」の句法有るか。余之
有りと曰う。仲尼燕居に、「子貢曰く、敢えて問う、將に何を以て此の中なる者を為さんとするや、と。子曰く、礼なる乎礼な
り。夫れ礼は中を制する所以なり」と。「礼乎礼」は此の等の句法非ざるか。偽りて古文を作る者は、又句讀の間に於いて一破
綻を現露せざるか。)

「孝乎惟孝」という句法は、『礼記』仲尼燕居篇における「礼乎礼」においてもみることが出来、『尚書』君陳篇を偽作したものは
「句讀」の切り方において、破綻が現れているものと説いている。

*13 潘氏はまた「宋本有題為『集聖賢群輔錄』者、下注曰、『一曰四八目』、然則『集聖賢群輔錄』、蓋出於後人所改題、其本名如此也
(宋本の題に『集聖賢群輔錄』と為す者有り、下注に、『一に四八目と曰う』と曰う、然らば則ち『集聖賢群輔錄』は、蓋し後人
の題を改むる所より出で、其の本名は此くの如きなり)」とも述べている。

*14 『陶彭沢集』については『漢魏六朝百三名家集』第三冊に拠る。また前掲の汲古閣本、李公煥本などのそれぞれの目録や本集など
を参照した。

*15 司馬貞の生卒年については不明であるが、『史記索隱』は開元二十年(七三二年)前後に成書されたものとされている(李梅訓
「司馬貞生平著述考」(『安徽師範大學學報』人文社会科学版、第一期、二〇〇〇年)。また司馬貞のいう「又孔安国秘記作祿里」
の「秘記」は、ひとまず書名として解した。

*16 『文選鈔』の引用には『唐鈔文選集注彙存』(上海古籍出版社、二〇〇〇年、卷六二・一・七五五頁)を用いた。

*17 森野繁夫氏『文選雜識』（第一学習社、一九八二年、二五六頁）第三冊に拠る。なお、『唐鈔文選集注彙存』第三冊の卷末に付された引書目録に拠ると、「古賢集目」は本稿に挙げた一例しかみられない。

*18 「廊」字と「廊」字の異同が魯魚亥豕の相違であることは、本誌収録の小田健太氏『文選集注』江淹「雜體詩」訳注（八）殷東陽（興囑）仲文」の注釈「③虚廊」（七三頁）を参照。

*19 この点については拙訳『文選集注』江淹「雜體詩」訳注（六）孫廷尉（雜述）綽」（『筑波中国語論叢』三三号、筑波大学中国語研究室、二〇一四年）において指摘したことがある。

*20 章学誠「校讐通義」「辨嫌名第五」の第二条（葉瑛『文史通義校注』中華書局、一九八五年、下巻、九七四頁）を参照。

*21 拙訳「四庫全書総目提要 陶淵明集 訳注」（『文教大学国文』四一号、二〇一二年）

*22 四庫提要の文字の異同に、いち早く注目したのが石川忠久氏であり、石川氏前掲書では、陽氏「序録」の「両本」が「群輔録」提要において相違していること、「陶集」提要において「三本」に変更されている点について、「提要は、蕭統のテキストをあくまでも陽休之の時に先行するものと看做そうとしているのである」（一一九頁）と述べている。陽休之が八卷本と六卷本、蕭統本を参照していることは間違いないが、蕭統と陽休之の生年差が八年しか離れていないという点を重んじているのであろう。

*23 梁啓超氏『陶集考証』（『飲冰室合集』第二二冊所収の「飲冰室專集」九十六、中華書局、一九三六年、四六〇五五頁）を参照。また橋川氏前掲書「二論齊梁隋唐各本之編次」（四四九〇四五三頁・三〇五葉）を参照。

*24 郭紹虞氏『陶集考弁』（『照隅室古典文学論集』上巻、上海古籍出版社、一九八三年、二五八〇二六七頁）を参照。

*25 南唐本は、胡仔『苕溪漁隱叢話』巻四に『西清詩話』云、『淵明意趣真古、清淡之宗。詩家視淵明、猶孔門視伯夷也。其集屢經諸儒手校、然有『問來使』篇、世蓋未見、独南唐与晁文元家二本有之』（『西清詩話』に云う、『淵明意趣真古にして、清淡の宗なり。詩家淵明を視ること、猶お孔門の伯夷を視るがごときなり。其の集は屢しば諸儒の手校を経て、然して『問來使』の篇有るも、世蓋く未だ見ず、独だ南唐と晁文元家の二本に之有り』）などとする。

*26 梁氏前掲書に「隋志所謂『梁五卷録一卷』也。陽休之之所見之『一本六卷并序目、編比顛亂、兼復闕少』者、当即此本、其目錄原

在集外単行。故梁志僅云五卷。陽休之所見本、則已入錄於集為六卷也（隋志の所謂『梁五卷錄一卷』なり。陽休之の見る所の『一本六卷并序目、編比顛亂、兼復闕少』の者は、當に即ち此の本なるべし、其の目録は原より集外に在りて単行す。故に梁志は僅かに五卷と云う。陽休之の見る所の本、則ち已に錄を集に入れて六卷と為るなり）と述べられている。

*27 梁氏は「昭明太子八卷本」において、「陽休之云、『合序目誄伝、而少五孝伝及四八目。』宋庠云『有八卷者、即梁昭明太子所撰。合序伝誄等在集前、為一卷。正集次之、亡其録。』似昭明將旧五卷釐為六卷、益以序誄伝為一卷。附原録為一卷。故八卷也（陽休之云、『序目誄伝を合するも、而して五孝伝と四八目を少く』と。宋庠云『八卷なるもの有り、即ち梁の昭明太子の撰する所なり。序伝誄等を合して集前に在り、一卷と為す。正集之に次ぎ、其の録を亡ぶ』と。昭明旧五卷を將て釐めて六卷と為すに似たり、益すに序誄伝を以て一卷と為し、原録を附して一卷と為す。故に八卷なり」と述べている。なお、蕭統本の構成については後述の郭氏に従う。

*28 橋川氏前掲書「攷餘一」（五二九～五三四頁・四十三～四十五葉）を参照。

（筑波大学大学院人文社会科学研究所博士課程）